脚本　矢口夏梨

ミニドラマ

イイわたし

EP1　「清水伶凪」

EP2　「上野美月」

EP3　「三浦陽菜」

EP4　「イイ」わたし

「イイ」わたし

名前　矢口　夏梨

登場人物

〈主人公〉

清水 伶凪（17）〈しみず　れいな〉

上野 美月（17）〈うえの　みづき〉

三浦　陽菜（17）〈みうら　ひな〉

〈家族〉

清水渚（しみず　なぎさ）伶凪の妹

清水章人（しみず　あきひと）　伶凪の父　学者

上野美香（うえの　みか）　美月の母

三浦直樹（みうら　なおき）　陽菜の父

三浦花菜（みうら　はな）　陽菜の母

〈担任〉

平沼健一（ひらぬま　けんいち）　2-Bの担任

〈伶凪の中学時代の同級生〉

中鉢琴美

花村美里

〈三浦取り巻きクラスメイト〉

小沢

荒井

吉野

〈その他クラスメイト〉

東　男子クラスメイト　サッカー部

佐々木　男子クラスメイト　サッカー部

石原　男子クラスメイト　サッカー部

米田　入りづらそう男子

松田　諦め男子

柴崎　あまりがちなひと

後藤　いびきがひどいタイプ

佐藤　メイク未経験

〈他クラス〉

高橋　サッカー部

松本　下駄箱女子

関　下駄箱女子

岡本　噂話

鈴木　噂話

〈先生〉

小林先生　2･A担任　男の先生

川島先生　3･A担任　サッカー部顧問

〈街〉

美容師

ヘアサロンに来たお客さん

洋服屋の店員

お客さんA

お客さんB

お客さんC

女性モデル

施設利用者さんA

EP1:「清水伶凪」

01　道・学校からの帰路（夕）　※伶凪回想

体育着姿の女子３人（伶凪を含む）が下校している。
背負っている体操着袋には花紅中学校の文字が書かれている。
伶凪、ノートを開きながら二人に比べて少し後ろを歩いている。

中鉢「今日ほんと惜しかったよね」
花村「まーね。でも、正直負けそうな気はしてたんだよね」
伶凪、黙って二人の話を聞いている。
花村「んで、赤組優勝かなとか思ってたら、本当に優勝したし」
中鉢「え、私もそれ思ってた」
二人、共感し合って話が盛り上がっていく。
中鉢「てかまぁ、最後のリレーでパス落としてなければ、正直勝ててた」
花村「それ思った。木下さんなー。私走った方が良かった説？」
中鉢「本当は走りたかったんだもんね」
花村「あの時、風邪治ったばっかだったからなー」
中鉢「それなかったら美里が選ばれて、今日のリレーも勝って、」
中鉢・花村「優勝してたかも!?」
伶凪「それはないよ」
中鉢・花村、立ち止まり後方にいた伶凪の方を振り返る。

伶凪、ノートを見ながら話す。

伶凪「全11種目。一番高い種目で15点なのに結果は30点も差があって惜しくはない。あと、リレー前の時点で逆転できないのは既に決まっていたから、バトンミスも木下さんも負けの大きな原因ではない」

中鉢・花村、表情がキツくなる。

伶凪、続ける。

伶凪「あと、美里の正常時のタイムより木下さんのタイムの方が、これまでの体育での結果を見ると常に早かったから、よっぽどのことがない限り、木下さんが最善の選手選択だよ」

伶凪、顔を上げて二人を見る。

中鉢「何マジレスしてんの」

花村「私がカッコ悪いやつみたいになるじゃん。あんたのせいで」

中鉢・花村、「行こっ！」と、不機嫌のまま歩いていく。

伶凪、その場で首をかしげる。

02

清水家・中学生の伶凪の部屋　※回想続（夜）

伶凪、部屋着姿で肩にタオルをかけ、少し髪が濡れた状態で机の前に座る。

※お風呂上がり。

伶凪「どういうことだ？」

伶凪、ノートに整理し始める。

机には同じ型のノートが並んでいる。

×　　×　　×

伶凪、ノートに書き続けている。

ペンで頭をコツコツ叩く。

伶凪「だめだ、全然意味わからない。なんで私のせい？」

部屋の扉からノック音がしてすぐ、妹の清水渚が顔を出す。

渚「お姉ちゃん」

伶凪「返事が帰ってきてないのに開けるなら、ノックの意味ないから」

渚、嫌味ったらしく言う。

渚「そーゆうとこ、お父さんの血だよね。論理的な学者の血」

伶凪の机に付属した棚、（清水章人　論文コピー）と書かれたファイルが何冊も並んでいる。

伶凪「あなたにもその血入ってるから」

渚「私、ママの血の方が強いもーん。ノートにわざわざいろんなデータ書き留めたこともないし」

伶凪、少し説教染みて。

伶凪「だって、大量のデータと基準あってこそ正しい結果が導かれるんだよ!?」

渚、すぐ言い返す。

渚「感覚でも、ママみたいに大正解な美味しい料理も可愛いものも作れます」

伶凪「明確な基準がないものは正誤を決められないのでノーカウント」

渚、頭いい人を誇張したように話す。

渚「それは偽だね。基準がぼやけてたって、だれかのときめきであれば正、正誤に明確な基準があることは必要条件です」

一瞬シーンとした空気が流れる。

伶凪「なんていい加減な。で、なに?」

渚、二体の指人形を差し出す。

渚「家庭科の授業で作ったけど、いらないからあげる」

伶凪、受け取り見つめる。

伶凪「もう一体ない?」

渚、食い気味で返答する。

渚「ないよ」

× × ×

伶凪の後ろ姿。

机に向かい両手に指人形をはめ、ぶつぶつ言っている。

伶凪、動きが止まる。

伶凪「カッコイイってひとつじゃない？」

タイトル『「イイ」わたし』

03

学校・2-B教室　※夏休み前（以降同じく）

窓際、一番後ろの席。

白の半袖ワイシャツを着た伶凪。

ノート、サッカーボールマークが描かれたインデックスのついたページに書き込みをしている。

佐々木の声「それでさ、朝練の後、『お前今日ミス多かったぞ』とか言われてさー」

廊下側の一番後ろの席、朝練終わりのサッカー部の男子生徒（東と佐々木）がTシャツの上からワイシャツを羽織り、そのボタンを止めながら話す。

机の上に置いたカバンからはジャージがはみ出している。

佐々木「いや、兄貴のスパイクと間違えたんだってーみたいな」

伶凪、ノートに書き込んでいる。

伶凪M「佐々木くん、サッカー経験者の兄あり」

東「まぁ、どっちにしろ、全部お前のミスだろ」

佐々木「いや、辛辣〜」

伶凪、書きながら吹き出すも、怪しまれないようなんとなく誤魔化す。

東の声「てか、あんだけカッコイイ兄ちゃんのスパイク履いても、お前かっこよくならないな」

佐々木の声「うるせーよ」

伶凪、書く手が止まる。

伶凪「カッコイイ…どのだろ」

石原「清水さん」

伶凪、驚き瞬時にノートを閉じる。

ジャージ姿で鞄を背負っている石原、一枚の紙を持って伶凪の机に近づく。

石原「なに、そのノート」

伶凪「えっと、ネタ帳…？」

石原「あーいつもすごいもんね。これ」

石原、「クラス新聞」と書かれた紙を伶凪の前に差し出す。

石原「内容点検して大丈夫だったから、申し訳ないけど自分で貼り直しておいてって、先生が」

伶凪、ぺこぺこしながら紙を受け取る。

伶凪「あ、わざわざありがとうございます」

石原、軽くペコっとすると、駆けて去っていく。
※東と佐々木の方。
伶凪、石原の行った方向を見る。
佐々木、茶化すように。
佐々木の声「お前はやく着替えろよ」
石原、ノリでキレる。
石原の声「さっき先生に頼まれたことやってんだよ」
伶凪、ほっとして息を吐く。
新聞を持って席をたち、教室前方に向かう。

04

同・2-B教室入り口付近の掲示板前

伶凪、「掲示板」と画用紙の貼られたコーナーの前でクラス新聞を張り替え終わる。
短いスカート。
緩く巻かれた髪。
たまにチラッと透明ピアスも見える。
女子生徒3人（小沢、荒井、吉野）、メイクの話をしながら騒がしく教室に入ってくる。
※張り替えをしている伶凪の後ろを通る構図。

吉野「あ、でも、陽菜パパ元々メイクアップアーティストでしょ？」

陽菜、３人に視線を向けられながら最後に教室に入ってくる。

※陽菜はピアスなし。

陽菜、濁すように返答する。

陽菜「え？」

伶凪、クラス新聞を張り替え終わり振り返る。

陽菜と距離が近く、ぶつかるかと思い後ろに避ける。

陽菜、そのことに気が付く。

陽菜「あ、清水ちゃんごめん」

伶凪「すみません、私も見てなくて」

伶凪、ぺこぺこした低い姿勢のままその場を立ち去る。

吉野の声「どした？どした？」

吉野、状況を見ておらず、少し驚いたように聞く。

陽菜の声「ぶつかりそうなっちゃって」

05

同・2-B教室窓際・一番後ろの席

伶凪、自分の席に戻りノートに書き込んでいる。

（三浦さんのお父さん　元メイクアップアーティスト）

伶凪「そっか。三浦さんも血が…いや、決めつけは正当が遠のく」

伶凪、小さく深呼吸する。

×　　×　　×

伶凪、チラチラ女子四人を見て書き続けていると、廊下に４人のせいで教室に入りづらそうにしている男子生徒（米田）に気がつく。

伶凪、すぐ教室後方扉にも目をやる。

前から入ることを諦めたクラスメイト（松田）が入ってきている。

伶凪、ページをめくり書きながら。

※見えないが注意マークのインデックスがついたページ。

伶凪「入り口付近で人が溜まると、入るの躊躇っちゃうよね。自分より序列が高い認識があると特に」

入り口の扉の方から大きな音がして視線を向ける。

美月「ほーら。ここ溜まんないでよ」

担任の平沼のカゴを持った上野美月、教室の前方入り口から入ってきている。

荒井、反射的に「つよ」とツッコミを入れる。

美月「それはごめん」

美月、豪快に開けた扉を軽く撫でる。

伶凪、急いで星マークのインデックスがついたページを開く。

美月「でも、みんな教室に入りづらくなるから、せめて溜まるなら窓側にして」

美月、窓側の方を顎でクイっと指す。

女子４人、顎につられてチラッと伶凪側を見る。

伶凪、目が合いそうになり少し逸らすも、すぐ視線を美月に戻す。

美月「あとスカート丈ー」

美月、語尾を伸ばしながら教壇にカゴを置く。

伶凪、自分の席に戻っていく美月を目で追う。

伶凪「カッコイイな、上野さん。ああ成りたい人生だった」

伶凪、ノートに

（注意は正当な理由と簡潔な言葉で。）

（受け入れてもらえるような代案の提案も解決のための最善の策。）

と書く。

サブ黒板、「本日の時間割」のところに今日の時間割が書かれている。

（本日の時間割、一限古文、二限数Ⅱ、三限現文、四限、体育、五限現社）

六限目には（総合）と書かれている。

×　　×　　×

（本日の時間割、六限目総合）
五限目までの授業は既に黒板消しで消されている。
黒板、（修学旅行の班決め）と白く大きな字で書かれている。
美月、その黒板を背に教壇の真ん中に立って話している。
美月「班の決め方で良い意見がある人いますか」
伶凪、一枚の紙、上の方に（修学旅行の班決め）とタイトルを書く。
紙の下にいつものノートが開いたまま敷きになっている。
ノートを紙の上に持ってくる。
ノートの上部、（修学旅行の班決め）と書かれている。
ぱらぱらと文字の書かれたページを遡るように捲る。

06

同　※伶凪の回想　春

伶凪、長袖ワイシャツの袖に少し埋もれた手でノートを1ページ遡るように捲る。
白紙のページが開かれる。
伶凪、（総合）と書きはじめる。
平沼と美月、伶凪の方を見ながら教室前方で話している。
伶凪、（議題 ）と書いたところ。

美月、伶凪の机をトントンと叩く。
伶凪、ノートを瞬時に閉じる。
美月「伶凪ちゃん、話まとめるの得意だよね？」
伶凪、なんとなく頷きながら。
伶凪「まぁ、得意？不得意ではないと、思います」
美月、笑顔でさらに返す。
美月「だよね！クラス新聞も頼まれたって聞いた」
伶凪、少し早口で。
伶凪「そうだけど、上野さんのまとめる力には及ばないよ。先生も学級委員長の上野さんには頼めないから、妥協して頼んだんでしょうし」
美月、笑いながら紙を持っていない方の手を体の前でパタパタする。
（否定の意）
美月「そんなことないよ。先生曰く、伶凪ちゃんはクラスで一番ストレスフリーな文章とまとめ方で読みたい文なんだって。あたしのは圧が強いって（笑）」
伶凪、ちょっと嬉しくなる。
伶凪「そう、なんだ」
美月、紙を伶凪の前に差し出す。
美月「ってことで、ノート書記お願いしてもいい？」
伶凪、勢いに圧倒されて紙を受け取る。

美月、キラキラして見える。

美月「得意は、積極的に活かさなきゃ」

※回想おわり

07

学校・2-B教室　※総合の時間

教壇の美月。

美月「では、みなさん話をする程度以上の仲の人とはなりたいと言うことは一致しているので、一度20分まで自由にメンバーを決めて前の方に名前を書いてください」

伶凪、紙に書き込む。

美月「ただし、どこにも入れない人とか仲間はずれとかが出た場合、別の決め方にすぐ変更するので、うまく組んでくださいね。自己主張しっかり！」

クラスメイトたち、「うぃー」と返事する。

伶凪、紙をずらしてノートに書き込む。

ノート上部、（修学旅行の班決め）と書かれており、その下にメモされた文字がびっしり書かれている。

心の声が小さく漏れる。

伶凪「これは、今日も振り返らなきゃ」

平沼、総合の時間は教室後方に座っており、近くの一生懸命書き物をしている伶凪に声を書ける。

平沼「清水の書記、ほんと助かってるよ」

伶凪、平沼から体で隠しながら、こっそりと書くものをノートから書記用の紙に入れ替える。

教壇の美月。

美月「なにかー」

美月が指人形になる。

08

清水家・伶凪の部屋（夜）

伶凪、美月を真似するような声で右手人差し指にはめた人形を動かす。

伶凪（右）「意見ある人いますか」

伶凪、部屋着姿で肩にタオルをかけ、少し髪が濡れた状態。

机の棚、同じ型のノートが中学生の時以上にずらっと並んでおり、壁に「振り返り」と書かれた紙が貼ってあり、たくさんの正の字が書いてある、

伶凪、ノートの星のインデックスのページを開く。

伶凪、左手人差し指を動かしながらギャル口調で言う。

伶凪（左）「はい」

伶凪（右）「はい荒井さん」

09

白い異空間　※伶凪の振り返りゾーン

荒井、左を向いて立って主張する。

荒井「最初で最後の修学旅行、部屋も行動も好きな人がいいです！」

美月、右を向いて話す。

美月「他に意見のある方はいますか？」

美月以外左を向いて述べる。

柴崎「僕は余ってしまうことが多いので、くじ引きにして欲しいです。でも正直一人は話せる人が同じだと心強い」

後藤「いびきがひどいタイプなので、それでも気にならない人と同じ部屋がいいです。でも、旅行自体は仲良い人と回りたいかも」

美月、正面を向いて前のめりに。

美月「それでは、こうしましょう」

多くの拍手が聞こえる。

10

清水家・伶凪の部屋（夜）

伶凪、指の人形を外す。

伶凪「今日も上野さんのまとめは最善。すごいなー授業時間内で」

伶凪、独り言を言いながら「振り返り」の紙に「正」の一画を付け足す。

広げていたノートを閉じ、鞄にしまう。

伶凪「私の頭の整理もこれが最善」

ドライヤーを引き出しから取り出し、髪を乾かし始める。

11 学校・2-B教室

美月、教壇に立っている。

美月「それでは、今日はクラスボランティアの内容について話し合います」

陽菜、爪をいじっている。

伶凪、小さく拍手をしてノートに書き込み始める。

書記用紙が下敷きになっている。

平沼から声をかけられノートと紙をすり替える。

12 清水家・伶凪の部屋（夜）

伶凪、部屋着姿、タオルを肩にかけ、指人形をはめて動かしている。

拍手をし、終わると指人形を外す。
正の字の一画を付け足し、ノートをしまう。
ドライヤーをかけ始める。

13 学校・2-B教室

美月、教壇に立っている。
美月「それでは、今日は体育祭の出場種目について話し合います」
美月、陽菜の席の方をちらっと見る。
陽菜、隣の子とコソコソ話している
伶凪、書記用紙を下敷きにノートをとっている。
ノートの文字を楽しそうに何重ものまるで囲んでいる。
伶凪、ハッとして手を止める。
伶凪、平沼を警戒してチラチラ見ながらノートと平沼の間に体でブロックを入れるようにする。
平沼、不審がる。

14 清水家・伶凪の部屋（夜）

伶凪、正の字の一画を付け足し、ノートをしまう。

伶凪、部屋着姿、タオルを肩にかけながらドライヤーをかけ始める。

15

学校・2-B教室

平沼が教壇の真ん中に立つ。

平沼「朝も伝えたように、昨日の職員会議で、体育祭のメイク等の装飾ルールはどうするか、先生たちの間で意見が分かれた。そこで、生徒のみんなにも意見を聞こうとおもう。全体の意見であれば、僕は尊重されるように働きかけるから、全員が納得できる意見をまとめてくれ。あとはいつも通りお願いするよ。清水も」

美月・伶凪「はい」

平沼、教壇から退く。

美月、平沼の方に軽くお辞儀をして教壇の真ん中に立つ。

美月「それでは、これより体育祭の装飾ルールについて話し合いたいと思います。まず、装飾の有無を問います。あり、なし、どちらでもいいのどれかに一回、必ず手を挙げてください。では、ありの方」

生徒たちが「はーい」と7人手を挙げる。

三浦、小沢、荒井、吉野も元気よく挙げている。

美月、人数を数え黒板に書くと、続けて聞く。

美月「なしの方」

落ち着き目の女子生徒が多めに7人。

美月、黒板に書き続ける。

美月「どちらでもいいという方」

男子生徒が多く、11人挙げている。

美月黒板に書く。

美月「手を下ろしてください。ありとなしが同票になったのですが、誰か手を挙げた方の理由を答えられる方はいませんか?」

小沢が「はい」と手を挙げる。

小沢「装飾OKだった先輩たちの体育祭で撮った写真、SNS映えもすごかったから装飾ありがいいと思います。あと、かわいくしてると気分が上がって体育祭も盛り上がるし、良い思い出にもなるしで、一石三鳥だと思います」

美月「別に、体育祭の目的はSNS映えではないですけどね」

伶凪、紙に意見を書き込んでいたが、美月のらしくない発言に顔を挙げる。

美月、そのまま続ける。

美月「他に答えられる方いませんか?なしの方どうですか?」

誰も手を挙げず、シーンとなる。

恐る恐る一人の手が挙がる。

佐藤「あのー」

美月「はい佐藤さん」

佐藤、立って話し始める。

佐藤「私はどちらでも良いに手を挙げたんですけど、それはメイクの仕方がわからないからで、なしにした子たちの中にも、同じくできないからありだと浮くって理由で手を挙げた子達もいるみたいです。できればそこも考慮していただけると嬉しいです」

美月「確かに、そういう方もいるはず…」

陽菜、美月に被せ気味で発言する。

陽菜「え？私してあげるよ？メイク苦手な子にも、ヘアアレ苦手な子にも」

美月、いつもより低めのトーンで注意する。

美月「三浦さん、手を挙げずに発言しないでください」

陽菜、「はい」と手を挙げてすぐ話始める。

陽菜「私、メイクもヘアアレンジも得意だし、人にやるのも好きだから、早く来てもらえるなら何人でもサロンみたいにして対応するよ？」

あちらこちらの生徒から「頼みたい」という声が聞こえる。

伶凪、陽菜の発言に感嘆しながらメモをとる。

美月、クラスメイトの良い反応に顔が強張る。

美月「いやでも、そんな何人にもやってたら、教室は化粧品臭くなるし、体育祭自体に間に合わなくなるかもしれない可能性があるので、よくないと思います」

伶凪、いつもは最善の返答をする美月の崩れ具合に驚く。

陽菜「いや、まず大した激臭にはならないけど、気になるなら換気すれば良いし、

時間に関しては、だから早めに来てってさっき言ったし」
美月「いやでも、」
平沼、珍しく意見を言う。
平沼「三浦、負担大きくないか？」
陽菜、笑顔で。
陽菜「むしろ、嬉しいです。やらせてください」
荒井と吉野、こそこそと。
吉野「やっぱり、血ってすごいね」
荒井「どういうこと？」
吉野「うちらとはレベチって話」
平沼、その他生徒たちに向けて。
平沼「他の子達は？」
クラスメイトたち、「お願いしたい」と口々に言う。
平沼「上野、みんな納得みたいだよ。君は？」
美月、少し浮かない顔で。
美月「とりあえず、私もそれでいいです」
伶凪、ノートを書き、少し動揺しながら。
伶凪「私のカッコイイ、いなくなった？」

16　清水家・伶凪の部屋（夜）

伶凪、制服のまま机に向かい、開いたノートを前に唸っている。

17　白い異空間　※伶凪の振り返りゾーン

美月、正面を見ながら。

美月「別に、体育祭の目的はSNS映えではないですけどね」

伶凪「それはそうだけど、別に言う必要はないよね、思ったとしても」

美月「三浦さん、手を挙げずに発言しないでください」

伶凪「まぁ、それは間違いないか。言い方キツかった気もするけど」

美月「いやでも、そんなに何人もやってたら、教室は化粧品臭くなるし、体育祭自体に間に合わなくなるかもしれない可能性があるので、よくないと思います」

伶凪「え？どう言うこと？いつもなら換気すれば済むことも、三浦さんが先に早く来てやるって言ったこと覚えていて突っ込まないはずなのに」

18　清水家・伶凪の部屋（夜）

伶凪、右手にだけはめた人形に向かって問い詰める。

※右手は美月人形

伶凪「上野さんはメイクが嫌いなの？それとも三浦さんたちが嫌いなの？」

伶凪、勢いよく顔を机に伏せる。

伶凪「どういうことだー？」

渚、ノックしてすぐ扉を開ける。

渚「お姉ちゃん、早く風呂入って」

伶凪、出て行こうとする渚を伏せたまま呼び止める。

伶凪「渚――」

渚「返事が帰ってきてないのに開けるなら、ノックの意味ないから」

伶凪「正の一画がかけませんー――」

※二人同時。

渚、予想外で驚く。

渚「お姉ちゃん大丈夫？」

伶凪、顔を伏せて唸る。

×　×　×

伶凪の携帯、朝7時のアラームが鳴る。

伶凪、顔を伏せて唸っている。

渚、ノックせず部屋に入ってきてアラームを止める。

顔を伏せて唸る伶凪の状態を無理やり起こす。

渚「朝！風呂！学校！」

伶凪「うー」

19

学校・2-B教室に向かう廊下

伶凪、廊下を走っている。

伶凪「朝風呂なんか人生で初めてだー」

20

学校・2-B教室

伶凪、後ろのドアから勢いよく入り、急いで自分の席に着く。

息を整えながら、ふと教室前方を見る。

美月、高めのポニーテール、短めのスカート、耳たぶに銀色の点を光らせており、小沢、荒井、吉野に囲まれて話をしている。

伶凪、その一歩下がったところでいつもより落ち着いた雰囲気の陽菜がその集団を見ていることに気づく。

平沼、教室にバインダーをパタパタしながら入ってくる。

平沼「ほら席につけ、お前ら毎日会ってても積もる話があっていいな」

平沼、教壇に立つと、目の前にいる美月の姿に驚き、動揺する。

平沼「上野、俺も積もる話があるようだ」

美月、いつも仕事を請け負う時と変わらない堂々とした様子で「はい」と返事する。

伶凪、その様子をみながら、手をうずうずさせている。

21　学校・空き教室（家庭科室）内側　※昼休み

伶凪、扉の小窓から教室内を覗く。

22　学校・空き教室（家庭科室）前廊下

伶凪、周囲に人がいないか確認する。

23　学校・空き教室（家庭科室）内側　※昼休み

伶凪、ノートを持って空き教室にこっそり入ってくる。

廊下からは死角になる席に座る。

ノートをおいて右指のみを顔の前に用意する。

伶凪「緊急会議です」

伶凪、指を動かし声を変えながら。

伶凪右指「清水伶凪さん、上野美月さんは何が嫌いだったと思いますか？」

伶凪自身が答える。

伶凪「昨日は。上野さんは、メイクが、三浦さんたちが嫌いなのかなって」

伶凪右指「今日は？」

伶凪「そうではないかもしれないと思った」

伶凪右指「かもしれない？」

伶凪「うん、メイクをしていたし、三浦さんたちとも話していたから、本当は好きなのかもしれない」

伶凪右指「また、かもしれない。なぜ言い切らないんだい？メイクもしていたし、三浦さんたちとも話していた。だったら、『本当は好きだった』でいいじゃない」

伶凪「それは最善の答えじゃないから。だって、行動自体は、好きである証明には不足だから。ただの挑戦かもしれないし、明日には大っ嫌いになった理由になっているかもしれない」

伶凪右指「じゃあ、今日も最善の答えには至らなかったの？」

伶凪「うんん。最善の答えには辿り着いた」

伶凪右指「なんだった？」

伶凪「カッコイイは確実に一つじゃない」

伶凪右指「もはや上野さんがどうかは、関係ないか」

伶凪「んー。私のカッコイイを体現する人がいなくなって少し寂しいけど、行動は、『変わりたい』『今よりカッコよくなりたい』と思う気持ちの証明には充分だから」
伶凪右指「違うカッコイイに向かったのかもってことね」
伶凪「うん」
伶凪、背後から声をかけられる。
※陽菜。
陽菜「清水ちゃん」
伶凪、誰もいないと思っていたのに人がいる驚きと、恥ずかしさで動揺する。
伶凪「え!?三浦さん!?誰もいなかったはずなのに。てか、会議見られた！」
伶凪、立っている陽菜の方を見ると、いつの間にか伶凪のノートを手に取って読んでいた。
伶凪「あ」
陽菜、ノートを見ながら言う。
陽菜「上野さん、学級委員長辞めるって」
伶凪、動揺はおさまり、冷静にその言葉に頷く。
伶凪「可能性は考えてた」
陽菜、「ふーん」という反応をする。

24 職員室入り口窓前

平沼と美月、向き合って座り話をしているのが見える。

25

学校・空き教室（家庭科室）内側　※昼休み

陽菜「清水ちゃんは、今の自分。カッコイイと思う？」

陽菜は伶凪にノートを返しながら言う。

伶凪、ノートをじっと見つめると、ぼそっと呟く

伶凪「得意は、積極的に」

伶凪、陽菜から手に力を込めて、しっかりとノートを受け取る。

伶凪M「そうだ、私だって得意なんだ」

26

学校・2-B教室

伶凪、手を挙げている。

伶凪「はい」

伶凪M「なら、活かしたい」

×　×　×

スカートは短く、ピアスの空いた上野が教壇の上で決を取る。
美月「では、この結果を承認する人は拍手してください」
陽菜が真っ先に拍手する。
東、佐々木、石原も拍手している。
伶凪M「幸い、とっくの昔に、私のカッコイイを見つけている」
美月「多数の拍手をもって、承認とします」
美月は教壇を降りる。
伶凪が教壇の真ん中に立つ。
伶凪M「憧れて、恋焦がれているだけじゃもったいない」
伶凪「この度、新しく学級委員長に任命されました。清水伶凪です」
割れるほど大きな拍手の中、伶凪は凛と立つ。
伶凪M「成ろう、私のカッコイイに」
教室、どこからか一瞬強い風が吹く。

※EP1 終わり。

EP2：「上野美月」

27　学校・職員室

職員室の扉が3回ノックされる。
上野美月、扉を開けて職員室内に入ってくる。
美月「失礼します。平沼先生に用があって来ました」
美月、まっすぐ平沼の席に向かう。
平沼、進路希望の紙をペラペラと確認しながらぶつぶつ言っている。
平沼の見ている三浦陽菜の進路希望調査紙、その他の欄に（今すぐ学校を辞めたい）と書かれている。
平沼「教員人生史上一番心配な奴だ」
美月「おはようございます」
平沼「お、おはよう上野。毎日ありがとな」
美月「いえ、それに――」
平沼、進路希望調査の紙を脇に避け、机の下に置いた洗濯籠を取り出し、教科書やプリントを入れ始める。
平沼の近くの席、2-Aの担任小林先生とサッカー部顧問の川島先生が話している。
川島「小林先生、実は昨日サッカー協会からU-18の召集連絡があって」
小林「うちの高橋くんですか？」

美月、視線を向けている。

川島「そうです。本人にはもう伝えてあるんですけど。反応がちょっと」

川島、渋い顔をする。

小林、察した顔をする。

小林「僕も挑戦して欲しいですけどね」

美月、その姿をみて少し口角が上がる。

美月「朝の職員室は新さに溢れていて好きですし」

平沼「そうか？先生方が昨日の自分を恨みながらバタバタしているだけだぞ」

平沼、プリントを入れ終わった洗濯籠を美月に渡す。

平沼「そういえば、進路希望また変わったんだな？」

美月「願書出すまでは、あれも暫定一位なんですけどね」

平沼「まぁ、上野に限って心配してないけどな」

美月、愛想笑いをする。

28

学校・2-B教室に向かう廊下　※05と同じ時間

タイトル『「イイ」わたし』

平沼先生のカゴを持った美月、教室に向かって歩いてくる。

男子生徒（米田）、2-B教室の前方入り口から入ろうとするもすぐに

やめ、後ろのドアに回る。
男子生徒（松田）、先に後ろの扉を開けて入って行っている。
美月「どうしたんだろ」
美月、教室の前方入り口に到着。
扉についた小窓から、教室内、扉の前で溜まっている女子４人（陽菜、小沢、荒井、吉野）が見える。
美月「あぁ」
話し声が廊下まで聞こえている。
小沢「スカート。腰のとこ変になってるよ」
陽菜「本当だ」
吉野「切ったほうが楽なのに」
美月Ｍ「校則破っても他人と同じ格好とか、何がいいんだか」
美月、扉の前で一つ息を吐く。

29

学校・2-B教室

４人の女子、入り口前に溜まって話している。
荒井耳を触りながら。
荒井「いやでも、痛くないし楽だよ?陽菜も開けなよ～」
陽菜「えー、私ほら、ビビリだし」

教室の扉が勢いよく開き、美月が入ってくる。
扉が「ぐわん」と大きめの音を立てる。
４人の女子たち、話をやめ驚いた顔でこちら（美月）を見ている。
美月の目線、４人の膝上で短いスカート。

美月Ｍ「あー」
軽くメイクがされほんのり赤い唇や頬。
美月Ｍ「本当に」
巻かれた髪。
隙間からは透明なピアスがちらりと見える。
※陽菜ではない
美月Ｍ「何がいいんだろう」
美月「ほーら。ここ溜まんないでよ」
荒井、反射的にツッコミを入れる。
荒井「つよ」
美月「それはごめん」
美月、豪快に開けた扉を軽く撫でる。
美月「でも、みんな教室に入りづらくなるから、せめて溜まるなら窓側にして」
美月、窓側の方を顎でクイっと指す。
女子４人、顎につられてチラッと窓側を見る。
※遠くの席の伶凪、不自然にキョロキョロしている。

巻かれた髪と短いスカートが目の前で揺れる。
美月、一度目をギュッと力強く瞬きをする。
窓側に視線を向けている４人の間を通って教壇に向かう。
美月「あとスカート丈―」
美月、語尾を低く伸ばしながら教壇にカゴを置く。
背後で話す声が聞こえる。
吉野「別にスカート短いのは迷惑かかってないしいいでしょ」
小沢「そもそも切っちゃってるしね！」
美月、振り返らずにまっすぐ自分の席に向かう。
４人の女子の笑い声が聞こえる。
席に座った美月、自分のスカートの裾を触る。

30

学校・下駄箱　※下校時間

美月、自分の下駄箱からシューズを取り出し、屈んで地面に置く。
美月、向いの下駄箱前で話している女子（松本、関）の太ももあたりに目線がくる。
スカートが短い。
※陽菜たちよりは長めであまり先生たちにバレない程度の長さ。
美月、ぼそっと呟く。

美月「短っ」

31

学校・玄関から校門までの道　※下校時間

美月、校門に向かって歩いている。

周囲を同じように下校する生徒が歩いている。

結んだ髪にチラッと見えるインナーカラー。

美月「禁止された髪型」

少し伸びたうっすらピンクでキラキラした爪。

ツヤツヤ発色のいい唇。

美月「禁止された化粧」

32

街中・道

美月、歩いている。

ヘアサロン、美容師とお客さんが出て来る。

お客さん「外だとまた違う色に見えますね！かわいい」

美容師「すごくお似合いですよ」

美月、通り過ぎる。

洋服屋さん、入り口、（赤字覚悟！当店初の試み！）と大きく書かれたポップが目立っている。

店員「いらっしゃいませー」

美月、通り過ぎる。

33

上野家・リビング

テレビの音が鳴っている。

美月、ソファーの前に体育座りで座りクッキーを食べている。

母親の上野美香、ソファーに座りテレビを見ている。

美月母「あれー！この人みづの好きな人じゃない？」

※家での美月の呼び名は「みづ」。

美月「前ね」

美月、クッキーを食べている。

美月母「あらやだー、可愛いじゃない。結婚したいわ」

×　×　×

美月母「あれー！これ、みづがハマってるお菓子じゃない？」

美月「もうちがう」

美月、クッキーを食べている。

美月母「ママはあんまり好きじゃないのよねー、あの食感」

×　×　×

美月母「あれー！」

美月「変わったってば」

美月、お菓子の入れ物をみると、中身のクッキーがなくなっている。

美月母、それに気が付く。

美月母「クッキーまだあるよ？」

美月「んー…」

美月母「おせんべい？」

美月「…うん。お願い」

×　×　×

美月母、せんべいの袋を美月に渡す。

美月母「はいどうぞ」

美月「ありがと」

美月、せんべいの袋を開ける。

美月母、新しいクッキーの袋を持ってきて開け、バリバリと食べ始める。

美月母、ちょっとクッキーで咽せる。

美月母「水は？口の中の水分無くならないの？」

美月「全然」

美月、もくもくとせんべいを食べる。

美月母、台所に行き水道水を適当なコップに注いで飲み始める。

34

学校・2-B教室に向かう廊下

チャイムの音が長く響いている。

二人の男子生徒がバタバタと教室に向かって走る。

米田「やっべ、次なに！？」

松田「総合！総合！」

少し前を走っていた米田、教室のドアを勢いよく開ける。

米田「セーフ」

米田「よかったー」

二人、教室の中に入っていき扉が閉まる。

35　学校・2-B教室

美月、教壇上で。

美月「それでは、これより体育祭の装飾ルールについて話し合いたいと思います」

×　×　×

伶凪の書くノート書記用の紙、

（装飾　あり7、なし7、どちらでもいい11）と書いてある。

小沢が「はい」と手を挙げる。

小沢「装飾OKだった先輩たちの体育祭で撮った写真、SNS映えもすごかったから装飾ありがいいと思います。

あと、かわいくしてると気分が上がって体育祭も盛り上がるし、良い思い出にもなるしで、一石三鳥だと思います」

美月M「絶対に楽しいけど」

美月「別に、体育祭の目的はSNS映えではないですけどね」

美月、そのまま続ける。

美月「他に答えられる方いませんか？なしの方どうですか？」

美月M「否定したい」

恐る恐る一人の手が挙がる。

佐藤「あのー」
美月「はい佐藤さん」
美月M「委員長だから」
佐藤さん、席に座る。
美月「確かに、そういう方もいるはず…」
陽菜、美月に被せ気味で発言する。
陽菜「え？私してあげるよ？メイク苦手な子にも、ヘアアレ苦手な子にも」
美月、陽菜に鋭い視線を送り顔が強張る。
美月、いつもより低めのトーンで注意する。
美月「三浦さん、手を挙げずに発言しないでください」
美月M「というのは関係ない」
陽菜、「はい」と手を挙げてすぐ話始める。
陽菜「私、メイクもヘアアレンジも得意だし、人にやるのも好きだから、早く来てもらえるなら何人でもサロンみたいにして対応するよ？」
あちらこちらの生徒から「頼みたい」という声が聞こえる。
美月、陽菜がキラキラして見える。
美月、顔が緩む。
美月「羨ましい」
美月、小声であったため紛れた。
手に汗を書いている。

美月、顔が再び強張る。
美月「いやでも、そんなに何人もやってたら、教室は化粧品臭くなるし、体育祭自体に間に合わなくなるかもしれない可能性があるので、よくないと思います」
美月、スカートで汗を拭う。
陽菜「いや、まず大した激臭にはならないけど、気になるなら換気すれば良いし、時間に関しては、だから早めに来てってさっき言ったし」
美月「いやでも、」
美月M「やっぱり欲しい」
平沼、教室後方から声を出す。
平沼「三浦、負担大きくないか？」
陽菜、笑顔で答えている。
陽菜「むしろ、嬉しいです。やらせてください」
美月、違うことに集中して話を聞いていない。
美月「どうしよう」
平沼「上野、みんな納得みたいだよ。君は？」
美月、少し浮かない顔で。
美月「とりあえず、私もそれでいいです」
美月、教壇を降りる。

36

小学校・入学式　※小学生時代の回想

小さな足、ステージに登る。

小学6年生の運営委員長が華やかに飾られたステージの真ん中に行き、挨拶を始める。

運営委員長「新一年生の皆さん、ご入学おめでとうございます」

美月、そわそわしながら座っている。

美月N「小学一年生。入学式で話している人は全員大人に見え、それより、これから始まる義務教育の生活に心が持っていかれていた」

×　×　×

※小学5年生の美月

在校生がぎっしり座った中に美月も座っている。

後ろの席、6年生がコソコソ話している。

6年生A「運営委員長頑張って」

6年生B「うん、行ってくる」

6年生Bが移動していく。

美月、先生方の並ぶところを抜けステージ横に移動していく6年生Bを目で追う。

アナウンス「次に、歓迎のことば」
6年生Bがステージに上がって話し始める。
美月N「5年生。一歳しか違わない6年生が偉そうで嫌いだと思った。けどそれ以上に」

×　×　×

※小学6年生の美月
美月、華やかに飾られたステージ中央に立つ。
美月「新1年生の皆さん、ご入学おめでとうございます。みなさんが入学してくるのを楽しみにしていました」
どこからか一瞬強い風が吹く。

37

学校・2-B教室　※帰りの会前

教室、がやがやしている。
生徒たち、各々係りの仕事をして忙しくしている。
美月、教室内を練り歩きながらノートを持ち主の席に返却している。
美月、陽菜の机の下、キラキラとしたピン留めが落ちているのを見

つける。
しゃがんで手に取ると、机にも対になるデザインのピン留めが置かれていることに気が付く。
拾ったピンを机に載せるも、離さずそのままポケットに入れようとする。

小沢「それ、陽菜のじゃない？」
美月、驚いて動きが止まる。
振り返ると小沢と荒井が立っている。
荒井「え、ほんとじゃん」
近くでプリントを配っていた吉野も気づく。
吉野「委員長、なんでポケットに入れようとしてるの？」
小沢「え、盗み？」
荒井「え⁉」
美月、心臓の音がどんどん大きくなっていく。
吉野「それ、スカート短いとかそんなのと比べものにならなくないですか？」
美月、堂々としだす。
美月「いや、まさか。まず、なんで私が盗むと思うの？これは…」
陽菜「上野さんのだよ、私があげたの」
陽菜、自分の席に戻ってきて座る。
上野、驚いて思わず声が出る。

上野「え？」

吉野、怪しがる。

吉野「本当に？」

陽菜、机に広がる配布物を整理しながら答える。

陽菜「うん。可愛くて買ったんだけど、2個はいらないと思って」

美月、陽菜を見続けている。

荒井「えーいいなー」

小沢「そーゆーの先に私に聞いてよ。いる？って」

荒井「えーじゃあそれより先に聞いて！」

小沢と荒井、小競り合いをする。

吉野、まだ疑っている様子で。

吉野「そんな委員長と仲良かったっけ？」

陽菜「まだまだ私を知らないね～」

陽菜、少しふざけるように返す。

美月、ピンの持った手をぎゅっと握る。

38 学校・校門

学生たち、校門前で手を振り合いながら下校している。

39

学校・空き教室（家庭科室）前廊下

陽菜、家庭科室の扉を閉め廊下を歩く。

美月、その陽菜を見つける。

美月「ねぇ」

陽菜、美月の声でゆっくり振り返る。

美月「あんたのじゃん、これ！」

美月、盗んだピンを陽菜に向けて突き出す。

美月「なんで自分のだって言わなかったの？なんであげたなんて言うの？」

陽菜、あっさりと。

陽菜「欲しい人にあげる。私そーゆーの好きだから」

陽菜、またくるりとふりかえり歩き出し、突き当たりの角を曲がっていく。

美月、廊下の角近くまで小走りして陽菜の後を追う。

角を曲がる前に早歩きに切り替え、曲がっていく。

40

学校付近の下校路

陽菜、下校路を歩いている。

美月、少し不機嫌そうに陽菜を見つめながら、その５メートル後ろをついて歩く。

41 本屋

陽菜、ファッション雑誌を手に取ってぱらぱらとめくる。
美月、陽菜が見える位置の本棚で適当な本を開きながら様子を伺っている。
陽菜、雑誌を棚に戻し、その場を立ち去る。
美月、陽菜がいた場所に小走りで来て、陽菜が手に取っていた雑誌を棚からとり、急いで会計に向かう。

42 服屋

陽菜、試着室から出てくる。
近くの「試着済」の紙が貼られたハンガーラックに服を戻し去る。
美月、陽菜が入っていた試着室の隣から陽菜のものと色違いの服を持って出てくる。
※学校カバンの他、雑誌の入った本屋の袋も持っている。

「試着済」のハンガーラックにかかった服を見つけ立ち止まる。
少し悩むも、持っていた服を持ってレジに向かう。

43 雑貨屋

陽菜、ピアスコーナーにずらっとかけられたピアスを眺めている。
美月、すぐ隣で同じように眺めている。
かわいいと思うピアスを見つけ、一つ耳に近づけ、鏡を見てみる。
そのまま他の商品も楽しそうに端から端まで眺める。
陽菜に目線を向ける。
陽菜、ピアスは手に取らず、耳たぶを触りながら鏡を見つめている。
美月、すこし冷静になる。
美月「耳は開けないの？」
陽菜、耳たぶを触るのをやめる。
陽菜「ずっと開けられないかもね」
陽菜、ぼそっと言いその場を立ち去る。
美月、その姿を見送る。
美月、またピアスを前屈みにながめ、端の方にピアッサーを見つける。
カバンの財布を確認する。

美月「私は欲しいんじゃない」

ピアッサーを二つ手に取り、駆け足でレジに向かっていく。

44

上野宅・美月の部屋

机の上にはピアッサー二つ、「アルコール」と書かれたウェットティッシュ、鏡が広げられている。

保冷剤を机に置く。

美月M「その瞬間、一番心奪われるものを」

耳が赤くなっている。

耳にピアッサーを当てる。

美月「やっていたいだけ」

バチンと大きな音がする。

45

上野宅・玄関

美月、玄関で靴を履いている。

※足元だけが映る。

美月母「みづ、本当にそれで行くの？」

美月「うん、行って来まーす」

玄関の扉が閉まる。

美月母「変わらないな、うちの子は」

美月母、リビングの方に戻っていく。

美月母「パパー、今回は電話担当パパねー」

46

学校・2-B教室に向かう廊下

短いスカート、高い位置で結えられ揺れるポニーテール。

耳たぶ、銀色のピアスが光っている。

※美月の姿。

47

学校・2-B教室

美月、教室の扉を開ける。

美月「おはよう」

どこからか一瞬強い風が吹く。

教室がどよめく。

窓際で話していた小沢、荒井、吉野、驚いて近づいてくる。

小沢「委員長だよね！？」
荒井「ピアスかわいい！」
吉野「あんなに校則だのなんだのってうるさかったのに、どういう風の吹き回し？」
美月「その時は本当にそれが一番だったから」
荒井「そんなことよりリップ何使ってるの？色可愛すぎない！」
美月「ん？あ、えっとね」
美月、カバンの中をガサゴソと探し始める。
吉野「てか、いいの？先生からの信頼も厚い学級委員長が」
美月、リップを見つけて荒井に渡す。
美月「良くないでしょ、学級委員長が率先して校則ガン破りは」
入り口のドアが開き、いつもより素朴な雰囲気の陽菜が登校してくる。
美月「だから辞めるよ、学級委員長。今の一番はこれだから」
小沢「勝手だけど、なんかカッコイイ」
荒井「うんうん」
吉野「あ、おはよう陽菜」
陽菜「おはよう」
陽菜、突っ立ったままでいる。
美月「三浦さんおはよう」
美月、キラキラしている。

笑顔の美月と表情の歪んだ陽菜、二人が向き合って立っている。

48 職員室

美月、平沼の後ろをついて職員室に入っていく。
少し職員室がざわつく。
美月、気にせず堂々とする。
平沼の席、椅子を一つ用意されそこに座る。
平沼「で、今すぐ学級委員長も辞めると。
上野、なにかあったのか？急にこんな変わって」
美月、少し考えながら答える。
美月「そうですね、変わったんですかね」
平沼「お前はなにも心配ないと思っていたんだが」
美月、「ははは」と愛想笑いをする。
平沼「今まで教えて来た生徒の中でも、一番しっかり者でいい生徒だったのにな」
美月「暫定でしたから」
美月、笑っている。

49 学校・教室 ※下校時間

美月、伶凪に（学級委員長ノート）と書かれたノートを渡す。
美月「これ、仕事内容全部書いてあるから使って？」
伶凪、ノートを受け取る。
伶凪「ありがとうございます」
美月「はーい」
美月、カバンに机のものをしまい始める。
伶凪、一度その場を立ち去ろうとするも振り返る。
伶凪「あの、上野さん」
美月、手を止め、顔をあげる。
伶凪、両手をまっすぐ下ろし、姿勢を正す。
伶凪「イイと思います、今も。ありがとうございました」
美月、不思議そうな表情で伶凪を見る。
伶凪、深くお辞儀をするとすぐ教室を出ていく。
教室には美月と陽菜だけがいる。
美月、また机のものをカバンにしまい始める。
陽菜「嫌じゃないの？」
美月「何が？」
陽菜「失うこととか、変わっちゃうこと」
美月「それは、何がかによるよ」
陽菜「…」

美月「地位や容姿ならイエス、嫌じゃない」
陽菜「じゃあ何だと…」
美月「挑戦する気持ち」
教室、どこからか一瞬強い風が吹く。
※EP2 終わり。

EP3：「三浦陽菜」

50　百貨店・一階広場・幼少期　※回想

人混みの中。
小さな陽菜、母：三浦花菜に抱っこされている。
※以降「陽菜母」表記。
父：三浦直樹、多くの人に囲まれ、説明をしながら女性モデルにメイクを施している。
※以降「陽菜父」表記。
陽菜母「パパカッコイイねー陽菜」
女性モデル、鏡を見てとても笑顔になる。
それを見て笑顔になる陽菜。
陽菜「うん！」

51　雑貨屋・外観　（夕）

陽菜、一人で入り口から出てくる。

52　道・三浦家付近　（夕）

三浦陽菜、塀の並んだ道を歩いている。
道角を曲がる。
三浦家が大きくなってくる。
家の明かりがついていることに気が付く。

陽菜「やば」

陽菜、家から死角になる場所に隠れる。
折っていたスカートを元に戻し、巻いていた髪は低めの位置でお団子にする。
なんとなく唇や目元を擦り、メイクを落とす。
小さくふっと一息つき、玄関の鍵、ドアを静かに開ける。

53 学校・2-B教室入り口 ※フラッシュ

最後尾を歩いて来た陽凪、教室のドアを閉めている。

吉野「あ、でも、陽菜パパ元々メイクアップアーティストでしょ？」

54 三浦家・リビング

タイトル『「イイ」わたし』

陽菜父、晩御飯の用意をしている。
陽菜父、肉のラッピングをとりニオイを確認。
陽菜父「うん、大丈夫だ」
陽菜父、頷き、調理を続ける。
家の至る所、消臭スプレーやディフューザーが置いてある。
陽菜、声が明るい。
陽菜「ただいまー」
陽菜父「おかえり」
陽菜「今日は早かったんだね」
陽菜、椅子に荷物を置く。
机の上、介護士に関する資料が広がっている。
陽菜、台所で手を洗おうとする。
陽菜父、それを見切って執事のように案内する。
陽菜父「ちょっとそこのお嬢さま。こちらではなく、あちらでお願いいたします」
陽菜「あら、これは失礼いたしました」
陽菜父「いつもここで洗ってるでしょ？」
陽菜「たまたま間違えただけ」
陽菜、リビングを出た場所にある洗面所へ行く。
陽菜父微笑んでその姿を見ていると、違和感を感じる。
ニオイを嗅ぎ表情が曇る。

55　三浦家・陽菜の部屋（夜中）

部屋の至る所の引き出しを誰かが開けている。
※陽菜父。
陽菜、ベッドでぐっすり寝ている。
机の一番下の引き出しを開ける。
メイク道具やヘアアイロンなどが大量に入っている。

56　三浦家・リビング

寝起きの陽菜、部屋着姿でリビングに来る。
机の上、朝ごはんが置いてある。
※陽菜父はすでに出勤していない。
×　×　×
陽菜、空になった皿の前で手をあわせる。
陽菜「ごちそうさまでした」
陽菜、空の食器を持ってキッチンへ行く。
食器を洗い、それを置こうとする。

その場所にゴミ袋の入った袋が置いてある。

陽菜「こんな所置いたっけ？」

陽菜、いつもの収納場所に袋を戻す。

57

三浦家・陽菜の部屋・机の前

陽菜、制服姿に変わっている。

机にある鏡を自分に傾ける。

陽菜「今日顔浮腫んでるなー」

机一番下、メイク道具を入れている引き出しを慣れた手つきで開ける。

何も入っていない。

陽菜「え？」

陽菜、慌てて別の引き出しも引いてみる。

文房具や授業資料、ピン留めだけしかない。

※美月と対になっているピン留めも入っている。

陽菜「え、どういうこと？」

58

三浦家・洗面台

洗面台についた扉を全部開ける。

陽菜「ない」

59

三浦家・風呂場

陽菜、風呂の蓋を開ける。

陽菜「ない」

60

三浦家・トイレ

陽菜、トイレの蓋を開ける。

陽菜「なーーーーーい！」

61

三浦家・リビング

陽菜、リビングのカーペットなどもどかしながら確認する。

陽菜、キッチンの引き出しを開ける。

キッチン横、ゴミ箱に目がいく。

陽菜「まさか」

陽菜、ゴミ箱の蓋を開ける。
ゴミしか入っていない。
陽菜「やばい、もう家出なきゃ間に合わないわ」
陽菜、急いでスカートだけでもと折る。
キッチンから駆け足でリビングの入り口に行こうとするも、朝洗った食器に目がいく。
×　　×　　×
※フラッシュ。
食器を置く場所にゴミ袋が置いてある。
×　　×　　×
陽菜「パパ」

62
学校・2-B教室に向かう廊下

いつもより素朴な姿の陽菜、走っている。
前髪はぐちゃぐちゃで少し汗で濡れている。
教室のドアを開ける。

63
学校・2-B教室

陽菜、入ってすぐに短いスカート、高い位置でポニーテール、メイクをした美月の姿が目に飛び込んでくる。
驚きのあまり、入り口のところに立ったまま動けない。
美月「だから辞めるよ、学級委員長。今の一番はこれだから」
小沢、荒井、吉野も一緒にいる。
吉野「あ、おはよう陽菜」
陽菜、その場で返す。
陽菜「おはよう」
美月「三浦さんおはよう」
陽菜、やっとゆっくりみんなの方へ近づく。
美月の耳のピアス、光に当たって輝く。
陽菜、表情が歪む。

64 職員室前廊下

平沼と美月、窓から職員室内で話しをしているのが見える。
岡本の声「ねぇ聞いた？Bクラの学級委員長グレたらしいよ？」
鈴木の声「え、上野さん？そんなる人だと思わなかった」
岡本の声「てか、周囲の信用裏切った感すごくない？頼りにされてたし」
鈴木の声「平沼先生もかわいそう」

65 学校・空き教室（家庭科室）に向かう廊下

歩く陽菜の足、徐々にスピードが上がっていく。
呼吸が少し荒く、浅くなっていく。

66 道・三浦家付近 ※回想（小学生）

浅く早い呼吸の音とランドセルが暴れる音。
陽菜の小さい足、細かいピッチで回っている。

67 三浦家・洗面台・小学生の陽菜

玄関の方で、扉が開く音と同時に声がする。

陽菜「ただいま！」

陽菜父「陽菜、手洗いなよ」

陽菜「はーい」

小学生の陽菜、ドタドタと洗面台に向かって走ってくる。
小さくて届かないため、近くの踏み台を洗面台の前に移動させる。

台に乗り手を洗う。
台から降りて元の位置に戻す。
陽菜「うんとこしょ、どっこいしょ。まだまだカブは…」
台を戻すと、さっきまではなかったハート型のピアスを見つける。
陽菜「カワイイ！」
陽菜、拾って耳に当て、その姿を見ようと洗面台の前でジャンプする。
鏡に映る自分の姿がスローで見える。
耳元でピアスがキラキラしている。
陽菜「カワイイ！！！！！」
陽菜、眉毛も口角も上がっている。
陽菜「パパ！！！」

68 三浦家・リビング・小学生の陽菜　※回想続

真剣な顔の陽菜父、リビングで介護士資料を見ながらノートをとっている。
机にはメイクセラピストの資料も入っている。
ドタドタという音が近づいてくる。
陽菜「パパ！！！」

陽菜父、びっくりする。
小さな陽菜、陽菜父に向かってすごい勢いで走ってくる。
陽菜「パパ、パパ！見て見て！」
陽菜父、陽菜を受け止め優しく聞く。
陽菜父「どうした？陽菜」
陽菜、陽菜父にピアスを見せる。
陽菜「カワイイのみっけたの！」
陽菜父、表情が曇る。
陽菜、ピアスを耳元に近づけて見せる。
陽菜「パパみて！陽菜も似合う？カワイイ？」
陽菜父、無理やりピアスを奪う。
陽菜、びっくりしている。
陽菜父「陽菜、これは危ないから触っちゃダメ。やり直しできないものは触れちゃダメなの。パパ、陽菜には後悔に苦しんでほしくないから」
陽菜、口が山のようになり、目が涙でいっぱいになっている。
陽菜、大号泣する。
陽菜父「ごめんね。陽菜ごめんね。ひどいパパでごめんね」

69 ドラッグストア・入り口付近

ドラックストアの外観。

70 同・化粧品売り場

制服姿の陽菜、手には最低限必要な化粧品を持っている。
陳列されたピアッサーの前に立っている。
陽菜、勢いよくピアッサーを手に取る。

71 道・三浦家付近

三浦家外観。
明かりがついている。

72 三浦家・玄関外

陽菜、玄関扉前に着くとスカートの折り返しを直し、ドラッグストアの袋を鞄に入れる。

73

三浦家・リビング

陽菜父、キッチンで晩御飯を作っている。

野菜の匂いを嗅いでいる。

陽菜、声が明るい。

陽菜は「ただいま」

陽菜父、いつもより声が落ち着いている。

陽菜父「おかえり」

陽菜、落ち着いたトーンになる。

陽菜「ただいま…手洗って着替えてくるね」

陽菜、洗面台へ向かう。

陽菜父、陽菜の後ろ姿を見つめる。

74

三浦家・陽菜の部屋

机の上、ゴミ袋に入った化粧品とヘアアイロンが置いてある。

75

三浦家・リビング

陽菜と陽菜父、向き合って黙々とご飯を食べている。

陽菜「ごちそうさまでした」

陽菜、キッチンに食器を片付ける。

リビングを出て行こうとする。

陽菜父「陽菜、パパは…」

陽菜は立ち止まり、陽菜父の言葉を遮るように返す。

陽菜「年頃の女の子だから」

陽菜、拳を握っている。

少し強めの口調で。

陽菜「ただ、その程度だから」

陽菜、陽菜父の方を振り返ってみる。

陽菜父、寂しそうな顔で陽菜を見つめている。

陽菜、陽菜父に背を向ける。

陽菜、ゆっくり息を吐く。

陽菜「年頃の女子高生だから、パパでも私のものに触ってほしくないな」

陽菜、すぐにリビングを去る。

76

三浦家・陽菜の部屋

陽菜、ピアッサーを机の引き出しの奥にしまう。

陽菜、机に伏せる。
目の前が真っ暗になる。
扉を開ける音がする。

77 学校・空き教室（家庭科室）前廊下　※回想続

すこし息切れした陽菜、教室に入っていく。

78 学校・空き教室（家庭科室）・室内　※回想続

壁にくっついたストーブ。
陽菜、裏にある隙間から、顔が描かれメイクも施された石を取り出す。
教室奥、机の裏に隠れる。
陽菜、石に話しかける。
陽菜「なんだろうね、このモヤモヤ」
教室のドアが開き、誰かが入ってくる。
※清水伶凪。
陽菜、慌てて身をさらに潜め、声を殺す。

伶凪「緊急会議です」

陽菜、机からこっそり覗く。

伶凪が右手の指と向き合って話をしている。

陽菜、手元の石を見る。

×　　×　　×

陽菜、伶凪の背後からゆっくりと近づく。

真後ろまでくる。

伶凪、指との会話に集中している。

陽菜、伶凪の前に置かれたノートにひたすら文字が書かれているのを目撃する。

陽菜、背後から声をかける。

陽菜「清水ちゃん」

伶凪は驚きと恥ずかしさで動揺している。

陽菜、その間に勝手に陽菜のノートを手に取る。

ぱらぱらめくって開いたページ上の方（三浦さんのお父さん　元メイクアップアーティスト）という文字が書かれているのを見つける。

※EP3 終わり。

EP4：「イイ」わたし

79　学校・空き教室（家庭科室）・室内　※回想続

三浦陽菜、清水伶凪のノートを見ている。
陽菜、開いていた
（三浦さんのお父さん　元メイクアップアーティスト）
と書かれた場所からさらにページをめくる。
伶凪、一人騒がしくしている。
陽菜、ノート最後のページを開く。
（カッコイイとは？）と大きく書かれている。
陽菜「清水ちゃんは、今の自分。カッコイイと思う？」
陽菜、伶凪にノートを返しながら聞く。

80　スタジオ・小学生より前　※二重回想

タイトル『「イイ」わたし』

陽菜、キッズスペースから父：三浦直樹の仕事をする姿を母：三浦花菜と見ている。
※以降、各「陽菜父」「陽菜母」表記。

陽菜母の耳、ハートのピアスが付いている。
お客さんA「三浦さんありがとう！本当にお仕事が丁寧ですよね！」
お客さんB「もう、髪の毛もメイクも、三浦さん以外頼めなくなっちゃった」
お客さんC「またお願いしますね！」
陽菜父、笑顔で対応する。
陽菜父「ありがとうございます！またお待ちしております」
陽菜N「昔、パパは、メイクアップアーティストだった。腕は良く、丁寧且つ気の利いたサービスも有名で、それに魅せられたお客さんの一人が私のママだった」
陽菜母、笑顔。
陽菜母「陽菜、パパカッコイイね！」
陽菜、陽菜父を見つめている。

81

三浦家・リビング　※二重回想続

陽菜N「しかし」
陽菜、陽菜父を見つめている。
陽菜父の隣に陽菜母もいる。
陽菜母「介護の仕事に就くってどういうこと!?」
机の上、介護士の資料がいくつも広がっている。
陽菜母「後輩が有名になってお客さん取られたからって、後輩にアシスタント扱い

されるからって、メイクの仕事辞めるわけ!?」
陽菜父「今のままじゃ、この仕事じゃみんなを食べさていけない」
陽菜母「カッコわる」
陽菜父、ショックを受ける。
陽菜母「メイクの仕事してないあなたなんか、カッコ悪くて見てられない!これ以上一緒にもいたくない…」

82

小学校・入学式・校門　※二重回想続

紅白の花で装飾された（ご入学おめでとう）の看板が立っている。
陽菜N「そんなママは出ていってしまった」
陽菜と陽菜母、手を繋いでいる。
陽菜母「陽菜、入学おめでとう。ごめんね」
二人の手が離れる。
陽菜父、陽菜母とは逆の陽菜の手を握る。
陽菜父「陽菜、ごめんね」

83

三浦家・リビング　（夜中）※二重回想続

ガシャガシャという音に起きて来た陽菜。
リビングを覗くと、メイク道具を泣きながら捨てている父がいた。
父「メイクなんか…メイクなんか…嫌いだ。全部失うなら、最初から興味なんか持たなければよかった」
陽菜N「父が可哀想だと思った。父が嫌いなものは、なるべく私も好きにならないようにしたいと思った」
×　×　×
※フラッシュ。
陽菜父「ありがとうございます！またお待ちしております」
笑顔の父、笑顔のお客さん
×　×　×
陽菜N「でも、もう手遅れだった」

84　三浦家・陽菜の部屋　昼　※二重回想続

陽菜、急いで部屋に入ってくる。
陽菜、昨日陽菜父が捨てたはずのリップスティックをポケットから出す。
鏡がなく、缶ケースに歪みながらもかろうじて映る自分を見ながら、唇に色を乗せる。

×　　×　　×

※フラッシュ。

陽菜父のお客さん、口を「んぱ」とする。

×　　×　　×

記憶を頼りにやってみる。

陽菜「んっぱ」

陽菜、ほぼ口で音を言っているだけ。

×　　×　　×

※フラッシュ

陽菜父、お客さんの唇を中指で、優しくトントンする。

×　　×　　×

陽菜、自分の唇をトントンとする。

陽菜、ものすごく笑顔になる。

陽菜「カワイイ！」

リップのついた中指が服に擦れ、色がつく。

陽菜、笑顔が一瞬で焦った表情に変わる。

陽菜「パパに怒られる」

陽菜、慌てて部屋を出ていくも、戻ってくる。

机の引き出し一番下、リップを大事にしまう。

陽菜「落ちなかったらどうしよう！」

陽菜、勢いよく部屋を出ていく。

陽菜N「私もパパに、メイクに魅せられていた」

85

学校・空き教室（家庭科室）・室内　※回想続

伶凪、ノートをしっかりと受け取る。

陽菜「パパはカッコイイのに、ママのせいで自分をカッコ悪いって思ってる」

伶凪「…」

少し間が空く。

陽菜「清水ちゃんは上野さんをカッコイイって思ってるんだよね」

陽菜、伶凪のノートを指さす。

伶凪、少し考える。

伶凪「カッコイイと思ってた。かな」

陽菜、察したように笑う。

陽菜「あぁ、まぁ今日の姿みたら、過去形になってもしょうがないか」

伶凪「今日の見てというか、幻滅して過去形になったわけではないよ」

陽菜、理解できていない。

陽菜「どういうこと?変わったのが受け入れられなかったわけじゃなく?私のママみたいに…」

伶凪、首を横に振る。

伶凪「私と上野さんのカッコイイが違うってだけ」
伶凪、自信をもって話す。
伶凪「私のカッコイイは、早く安定して最適な結論を導き出せること。
その憧れる人物像に近かったから、上野さんを尊敬してた。これが最善の表現」
陽菜「なるほどね…わからないかも」
伶凪「そうだよ」
陽菜、ピンと来ていない表情をしている。
伶凪「カッコイイって確実に一つじゃない。だから、中には理解されず、できず。
馬鹿にされることもある」
陽菜「…」
伶凪「でもさ、自分以外の誰のものでもないんだよ。カッコイイって」
陽菜「自分以外誰のものでもない…」
伶凪「三浦さん、血って言われたことない？」
陽菜「血…？」
伶凪「私の父もちょっと有名でさ、大学の教授なの」
陽菜「あぁ、血ね」
伶凪「私の性格とか好きなものが父親に似てると、『お父さんの血だね』って」
陽菜「伶凪ちゃんは嫌？」
伶凪、笑顔で首を横に振る。
伶凪「むしろ嬉しい。一番尊敬している人だから。でも、本当に血なのかなって。

血が今の私の全てを作ったのだろうかって。もちろん、遺伝的な意味で言えば、いろんなこと研究されて証明されて、全く関係ないとは言えない。でも、」
陽菜「私の全てを血が作ったわけじゃない」
伶凪「だって、それがイイって思ったんだよ。私自身が、確かに。なんとなくの選択だってちょっとでもイイと思った方を選んでるんだよ。私にしては、ちょっと主観が強めな考えだけど」
伶凪、一笑する。
陽菜「でも、私も同じだ。イイと思ったものを選ばないなんて、できてない。諦められてない。理由がなんであれ、血だけじゃなく、確かに私のイイで選んでる。選んでいたい」
伶凪、少し考えた後、口をひらく。
伶凪「私は最善であることがカッコイイと思う。だから、今から私がかけるべきだと思う言葉をかけます」
陽菜、頷く。
伶凪「三浦さんは、今の自分。カッコイイと思う？」
陽菜、下唇をグッと噛む。
※回想終了

86 三浦家・陽菜の部屋

机に伏せたまま寝ていた陽菜、起きる。
陽菜、顔に変な跡がついている。
陽菜M「パパがとか、ママのせいでとかじゃない」
一回から陽菜父が料理をしている音が聞こえる。
※包丁の音
部屋の鏡、陽菜の変な跡がついた顔が映っている。
陽菜「ダメだ、カッコ悪い」

87 三浦家・リビング

陽菜父、机に朝ごはんを並べている。
陽菜「おはよう」
陽菜父「おはよう」
× × ×
二人、向かい合って食卓に座る。
陽菜父、ご飯を食べ始める。
陽菜、箸は持たず、陽菜父を見つめている。
陽菜「パパ。やっぱりその程度じゃない」
陽菜父、お味噌汁を飲んでいる手を止めて陽菜の方を向く。
陽菜「私、メイクアップアーティストになりたいの。今の高校も自主退学して、専

門的に学べる学校に入り直したい」

陽菜父、箸を置く。

眉は下がり、困り悲しむような表情を浮かべる。

陽菜父「陽菜には、パパみたいになってほしくない」

陽菜父、少し考える。

陽菜父「年頃の高校生か、ならもうわかっているよね、パパはメイクでいろんなものを失ったの。陽菜からまでもママを奪ったしね」

陽菜「でも、メイクで出会ったものだってたくさんあるじゃん」

陽菜父「それも今はもうないよ」

陽菜「私は、自分も好きて、人にも自信を持ってもらえるようなことがしたいの。それがメイクなの」

直樹「簡単なことじゃないよ」

陽菜「簡単じゃないけど、パパはそれをしてたじゃん！私もパパみたいにカッコ良くなりたいの」

陽菜父「ママは、パパがカッコ良くなくなったからいなくなったんだよ」

陽菜「それは、ママのカッコイイでしょ？私のカッコイイはパパだから。私はパパを選んだの！」

陽菜父、眉が下がったまま変に笑顔をつくる。

陽菜父「メイクアップアーティストとしてのパパは、ママもお墨付きでカッコ良かったかもね」

陽菜は強い口調で返す。

陽菜「わたしがかっこいいと思うのは、メイクしている時のパパじゃなくて、人を想っている時のパパだよ！」

陽菜父、驚く。

陽菜「メイクでお客さんを想うパパも、家族のために大好きなメイクを辞めるパパも。私は、最高にカッコイイと思ってます！」

陽菜、まっすぐな目で陽菜父を見つめている。

88

三浦家・陽菜父の部屋

陽菜父、引き出しにしまっていた（メイクセラピスト）と書かれた資料を取り出す。

陽菜父「よし」

陽菜父、何かを決めたような表情をしている。

89

学校・2-B教室

担任の平沼、教壇真ん中に立って話し始める。

平沼「急なお知らせとなってしまい申し訳ないが、本人の強い希望により三浦陽菜

は前期をもって、みんなよりも早くこの学校を去る運びとなった」
教室、クラスメイトたちがざわざわし出す。
伶凪、平沼に視線を向けたまま話を聞いている。
美月、ニヤリとする。

90 道・コンビニ、介護施設、薬局街

コンビニ外観。
陽菜「おつかれさまでした」
陽菜、コンビニエンスストアから出てくる。

91 学校・2-B教室

平沼「以上で朝の会は終わります。学級委員長！職員室に手伝い来てくれるか」
伶凪、「はい」と元気よく返事をする。
伶凪「がんばれ」
伶凪、メイクが施された石を机に優しく置く。
その下にはクラス新聞、（特別号　三浦陽菜さんから皆さんへのメッセージ）と大見出しが書かれている。

92　道・コンビニ、介護施設、薬局街

介護施設外観。

陽菜、駆け足で入っていく。

陽菜「おはようございます！」

93　介護施設・ホール

陽菜父、施設利用者にメイクを施している。

胸元のネーム、（メイクセラピスト　三浦直樹）と書かれている。

利用者さんたち、陽菜に気づきと笑顔で「陽菜ちゃーん」と手を振る。

陽菜父、陽菜に気づく。

陽菜父「ほらー。アシスタントさん遅いぞー」

陽菜、陽菜父の横につき、父のアシストする。利用者さん「陽菜ちゃん、学校のお金私が出してあげる。私の年金全部使っていいから」

陽菜父、笑いながら返す。

陽菜父「生活できなくなっちゃいますよ」

陽菜、笑う。

陽菜父「あと、自分のカッコイイを自分で掴み取ること。陽菜と二人で結んだ約束なので」

陽菜と陽菜父、見つめ合って笑って笑う。

陽菜父「アシスタントさん、そこの赤いリップ取ってください」

陽菜、言われた通り、メイクがずらっと置かれた場所から赤いリップを手に取る。

94

学校・2-B教室

パッケージの可愛いリップを渡す小沢の手。

小沢「はい」

美月、「ありがと」と受け取る。

入り口付近で美月と小沢、荒井、吉野が群がっている。

美月、小沢から受け取ったリップを塗りだす。

美月「本当に今日色なさすぎてさ、なのにリップ置いてきちゃって」

教室を出ようとする平沼、声をかける。

平沼「ほら、入り口を塞ぐな。リップも…。というか、上野髪の毛明るくないか」

美月、本当は染めたが、とぼける。

美月「えー地毛ですよ」

平沼は困り顔で呆れる。

平沼「本当に、上野はどこにいってしまったんだ」

平沼、「はぁ」とため息をしながら教室をでていく。

美月、ニヤニヤと笑っている。

美月「だって今、私のカッコイイはこれだから」

※終わり。